

---

# キヨピオの冒険

BG赤坂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キヨピオの冒険

### 【Zコード】

N1095F

### 【作者名】

BG赤坂

### 【あらすじ】

後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後  
日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後  
新後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後  
日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後日更新後

(前書き)

後日更新

## 第一章

昔々。

子供の好きなジョッペットじーさんがありました。  
しかし、ジョッペットじーさんは子供に恵まれる事がありませんでした。

そんなある日、ジョッペットじーさんは子供の代わりに、木の操り人形を作りました。

「ふう。完成したぞ。名前を付けなければ…。そうだな…、ピノキオ…、キノピオ…。いや、キヨピオにしよう…どうだ?いい名前だわ!」

……。

「ふう。わしも焼きが回ったか…。明日も早い。そろそろ寝るよ」

そう言って、ジョッペットじーさんはキヨピオを部屋の隅に座らせて寝てしまいました。

キヨピオの眠る部屋に星屑のような光が舞い込み、妖精が現れました。

妖精はキヨピオに持っている杖を振りながら言いました。

「起きなさい、キヨピオ。あなたに声と自由を与えましょう。あなたは自由に動けるのよ。」

杖はさつきと同じ星屑の光を放ち、光がキヨピオを包みました。  
すると不思議なことに、木の操り人形であるキヨピオは動き出しました。

キラピオは甲高い声で言いました。

「あれ？動ける？えつ！？」言葉も話せるー。」

驚きを隠せないキラピオは田の前にいる妖精に気付き、尋ねました。

「お姉さんだあれ？」

「私は青い髪の妖精。それより、キラピオ。私はあなたに声と自由を与えました。あなたは良い子になるのです。お父さん、つまりジエッシュペットじーさんの話をよく聞くのです。そして、良い子になれば！」優美として願い事を一つ口えて上げましょう。」

「ホントにー？」

「約束しますよ。」

そう言つと、妖精は「うわら」と消えて、再び光となつて窓から田へ行きました。

さて、朝になり、田をこすりながら起き出したジエッシュペットじーさんは、キラピオが元気よくあいさつをしました。

「おはよー、お父さんー。」

「ああ、おはよー。キラピオ、もう起きていたのか。……ええつ……」キラピオが動いて声を出していることにおどろいたジエッシュペットじーさんは、思わずほっぺたをつねりました。

「なんじや。キラピオが動いてあるー。キラピオがしゃべっておるー。わしは、まだ夢をみどるのか？」

「お父さん、夢じやないよ。妖精が僕に声と自由をくれたんだ。それに、良くてやもになつたり一つ願い事をかなえてくれるつてー。」

「おおひ、キラピオ！ 妖精様、ありがとうございますー！」

ジエッシュペットじーさんはキラピオを抱きしめ、それから大喜びで、キラピオが学校へ行けるように準備をしてくれました。

「では、お父さん。行ってきまーすー。」

「寄り道をするんじやないぞー。」

「はーーー。」

キヨピオは初めての学校で廊下の窓から外を見ていた。

始めて家の外に出たキヨピオはすべてが新鮮だつた。

外にいる動物達を見て驚いた。

さつきまで多くの動物達が楽しそうに遊んでいたと思つたらベルの音が鳴つた途端、動物達は校舎の中に走り込んで来て外には誰もいなくなつてしまつたのである。

キヨピオは自分の家にある、ジエッペットじいさんが作ったという掛け時計を思い出した。

あの時計はベルが鳴ると小人達が出て来て陽気な音楽を奏でながら踊り出すのである。

「キヨピオはちようびその時計と正反対だと思った。」

「キヨピオ君。」

不意に声を掛けられ少し驚いたが、そこにいたのは先生だった。先生は人間の若い女の先生だった。

「じゃあ、キヨピオ君。先生が合図したら入つて来てね。」

そう言うと先生は教室の中に入つて行つた。

「はい。みんなー、席に着いてー。今日は昨日言つた通り転校先を紹介します。入つておいでー。」

教室の引き戸が開いて、キヨピオが入つて來た。

「キヨピオです。よろしくお願ひします。」

少し緊張氣味に挨拶すると、先生が続けた。

「みんな、仲良くしてね。じゃあキヨピオ君の席は…、コーコギーー君の隣でいいかな?」

キヨピオは先生の指差した方を確認し、

「はい。」

と返事して席に着いた。

すると、「コーコギーーから話して來た。

「俺はコオロギのコーコギーー・クリケット。コーコギと呼んでくれ。」

「うん。 むりしへね、『ロゴギ。』

キラピオや『ロゴギ』とは少し離れた席に、ネコとキツネがいました。  
ネコは隣のキツネに言いました。

「しかし、転校生が木工細工とま魂消たぜ。」

キツネは答えた。

「まあな。 それも生きた木工細工とま…。 フフッ。」

「兄貴は怖いぜ。 何考えたんだですか?」

「放課後。 着いて来るか?」

「あたほつよ。」

放課後、学校にて。

同級生のキツネとネコはキラピオのところへやって来て、キツネが  
言いました。

「よお、キラピオ。 お前、この辺の事あまり知らないんだろ?」

「うん。」

「だつたらよお、俺らが面白い場所を教えてやるよ。」

キラピオは田を輝かせながら言いました。

「面白い場所!?」

ネコが言いました。

「ああ。 面白い場所だぞ。」

すると、近くにいた『ロゴギ』がそっとキラピオの背中を上って、耳  
元まで来て言いました。

「こいつらとは関わるな。」

キラピオもそつと聞きました。

「どうして?」

「何が何でもだ。」

キツネとネコは詰め寄つてきて言いました。

「行かないのか?」

「後悔するぞ。」

キヨピオは答えました。

「ううん。行くよ！」

「一口ギは呆れながら言いました。

「どうなつても知らねえぞ。」

「一口ギふて腐れてどこかへ行つてしましました。

学校を後にしてしばらく経ちました。

ピノキオはたまらなくなつてキッネ達に聞きました。

「ねえ、どこへ行くの？」

するとキッネは答えました。

「見世物小屋さ。」

「見世物小屋？」

「そうさ、君ならきっと、見世物小屋のスターになれるよ

「えつ、スターに？」

「スターもスター、君は大スターさ。」

「大スターか、学校よりも楽しそうだね。」

キヨピオは、キッネとネコについて行きました。

さて、見世物小屋の親方は人間の男でした。親方はキヨピオを見ると大喜びで、キッネとネコにお金を渡しました。

「さあさあ、世にもめずらしい、自分でうごく人形だよ！」

キヨピオが舞台に出て踊ると、お客様はしばらくビックリして、その後はわれんばかりの大喝采。

「わあー、ぼくはスターだ！」

キヨピオは嬉しくなつて、夢中で踊りました。

そして日が暮れる頃、舞台は大盛況の中、幕を下ろしました。

キヨピオは見世物小屋の親方に言いました。

「今日はとつても楽しかったよ。じゃあもう遅いからバイバイ。」

そしてキヨピオは帰ろうとしました。しかし、親方はキヨピオの肩を抑えて言いました。

「待ちな。お前は帰れないぞ。ずっと住み込みで働いてもらひ。」

キヨピオは困りました。

早く帰らないとジョッペットじいさんが心配することに気付いたのです。

キヨピオは何とか親方の手を振り払おうとしましたが、人間の男である親方の力には叶いませんでした。例えキヨピオが声と自由を手に入れたところで所詮キヨピオは操り人形。キヨピオの力は人間の子供が持つ力にも満たないのです。

しまいに、キヨピオは親方に殴られてしまいました。キヨピオは、殴った親方もビックリする位、遠くの壁まで飛ばされました。

キヨピオはすっかり伸びてしまい、気が付くと鳥力ゴヘ閉じ込められていきました。

「あーん、どうしよう。家へ帰りたいよー。お父さんに会いたいよー。」

閉じこめられたキヨピオが泣いていると、どこかから声が聞こえました。

「だから言つただろ。」

「誰？」

コーロギがキヨピオの服に付いているポケットの中から出てきました。

「「あんよコーロギ。さつきの事は誤るから助けてよ。」

「無茶を言つたな。俺にもできる事とできない事がある。」

しばらくすると、夜空からスースと光がさし込み、青い髪の妖精が現れました。

「あらキヨピオ、どうしてこんな所にいるの？寄り道をしない約束は？」

「どうしてって…。」

キヨピオは、本当の事を言つたら、人間の子どもにしてもうえなくなると思い、うそをつくることにしました。

「実は家へ帰る途中、こきなり見世物小屋の親方につかまつたんです。」

そのとたん、キヨピオの木の鼻がズンと伸びてこきました。

「あれあれ、どうして？ 鼻が伸びていいくよ。」

あわてるキヨピオに、青い髪の妖精は言いました。

「キヨピオ。いま、嘘をつきましたね。あなたの鼻は嘘をつくと、ドンドン伸びていくのですよ。」

「嘘じやないよ。本当だよ！」

キヨピオがそう言つと、ズンズンと、またまた鼻が伸びてしましました。

青い髪の妖精は、きびしい顔で言いました。

「いいですか。嘘というものは、一つつくと、新しいうそを重ねてつかなくてはならなくなります。キヨピオ、あなたは良い子に、なりたくないのですか？」

「なりたいよ！ 良い子になりたい！ 妖精、嘘を言つて、「めんなさい！」

キヨピオが泣きながら呟ぶと、青い髪の妖精は魔法の杖をクルリとふつて、のびた鼻を元通りにしてくれました。

そして、キヨピオが閉じこめられている鳥かごのカギを開けて、言いました。

「助けてあげるのは、今度だけですよ、キヨピオ。がんばって、きっと本物の良い子になるのですよ。」

そう言つと、いつの間にか腰を抜かしていた「一口ギに、青い髪の妖精はやさしく言いました。

「一口ギーー・クリケットですね？ もしよろしければ、これからもキヨピオが良い子になれる手伝いをしていただけませんか？」

「えつ！ わたしの名をご存じでーさすがは青い髪の妖精様。かしこまりました。この「一口ギ、キヨピオが良い子になれるよ」、頑張らせていただきます！」

「うふふふ。ありがとう」

妖精は微笑むと、星へと帰つて行きました。

「一口ギはキヨピオをつれて、ジェッペットじいさんの家へ帰りました。

それからキヨピオは、妖精との約束を守つて、良い子で楽しくすごしました。

ジェッペットじいさんは、とてもキヨピオをかわいがり、キヨピオもジェッペットじいさんの事が大好きでした。

その日の夜。

例のキヨピオを捕まえた見世物小屋は火事に遭つたそうです。

## 第二章へと続く

### 第二章

ある日、「一口ギはキヨピオに言いました。

「しかし、とんだ災難だつたな。アハハ…、面白。」

キヨピオは言い返しました。

「人の不幸を笑うなんて酷いぞ。鳥カゴに閉じ込められた僕の身にもなつてくれよ。」

「ああ、悪い悪い。ただ、あの二人が何かやらかすのをずっと待つていた俺の身にもなれよ。」

「どういう事?」

「俺はな、学園新聞の記者なんだ。だけど、近況報告みたいな記事ばかり書いていてもつまらない。やつぱり、新聞の一面を飾るのは不祥事だとは思わないか?」ここで本題。あの二人。キツネとネコは共に財閥の御曹子。要するに金持ちのお坊ちゃんということだ。親からどんな教育を受けたのか、あの二人は人を騙す腕は天下一品でな、二人に泣かされた奴は少なくない。ただ、その手口が巧妙で証拠が何一つ残されていない。事実、お前が捕まつた見世物小屋が燃

えた。」

「あの見世物小屋、火事に遭つたの？」

「そうさ。知らなかつたのか？おそらく、キツネとネコの仕業。お前諸共証拠を消すためだろう。『同級生を騙して見世物小屋に売り付けた』なんて世間に知れたら大変なスキヤンダルだろうからな。ただ、そはいかない。俺はふて腐れた振りしてずっとお前の傍にいた。二人が親方にお前と引き換えにお金を貰つた瞬間をカメラに抑えている。今回は証拠があるというわけだ。どうだ、面白いとは思わないか？」

「ちょっと、面白そうかも。」

「だろ？」

数日後、学園中に「コードギの書いた新聞の号外が学園中にバラ撒かれました。

新聞にはキツネとネコの悪事が赤裸々に書かれていました。

キヨピオはコードギに尋ねました。

「こんな事して大丈夫なのか？相手は金持ちのお坊ちゃまなんだろ？」

「大丈夫さ。怖かつたら隠れてな。」

『バーン。』

ちょうどその時、教室の扉が勢いよく開かれました。

案の定、怒り狂つたキツネとネコが飛び込んできました。ネコはぐちゃぐちゃに丸められたコードギの号外を広げながら怒鳴り付けました。

「これは一体どういうつもりだ！」

コードギは答えました。

「御曹子様の日頃の『』活躍を世に広めただけですが、何か不都合でも？」

「ふざけやがって……。」

悔しそうなネコに代わってキツネが言いました。

「君のよつな貧民君には理解し難いかもしけないが、世は「一口ギ君がしたようなことをプライバシーの侵害と言つて罰せられるのだよ?」

「プライバシーの侵害? ああ、額に汗を溜めて生活しているつり忘れていたよ。確か、権力者がいざといつときの為に作った法律だけ?」

「なるほどね、分かっている様だけど君は少しだけ無知だよ。」

「ところどさ、どうして自分達の行いを広められたことに怒ったの? それとさ、今君達が握っている号外の写真は御曹子の写真。それをぐちやぐちやにするなんて、とんだ無礼だよ?」

「……。」

キツネもネコも言い返しませんでした。

《ガラガラ…。》

少し沈黙があつた後、教室の扉が開きました。  
入つて来たのは先生でした。

学園の騒ぎを嗅ぎ付けたのです。  
「一体何の騒ぎですか?」

ネコが答えました。

「「一口ギが学園新聞にガセネタを書いたんだよ!」

「一口ギは言い返しました。

「ガセネタじゃない! 一人はキヨピオを騙して見世物小屋に売り付けたんだ。」

先生は怒りました。

「いい加減にしなさい! 一人がそんなことするわけないでしょ。とにかく「一口ギ君、一緒に職員室まで来なさい。みんな、悪いけど「一口ギ君の新聞集めて置いといてくれる? お願ひね。」

そう言つて、先生と「一口ギは教室を出て行きました。

それからしばらく経つても「一口ギは教室に帰つて来ませんでした。「一口ギが帰つて来るのを待つているうちに下校時間になり、また

おじこわんが心配すると思つて、帰る」としました。

帰り道、キコピオはまたあのネコに会いました。

キコピオは恐くなつて逃げ出しました。

すると、ネコはキコピオを追いかけて来たではありませんか！

キコピオは夢中になつて逃げているとネコは叫びました。

「待てよキコピオ！」

構わず逃げました。

しかし、キコピオはネコに捕まつてしましました。

どんな仕打ちを受けるのかと怯えるキコピオに対して、ネコは意外な一言を口にしました。

「この前は、悪かつたな。」

ネコの言葉にキコピオは戸惑いました。しかし、ネコは続けました。

「そのや、お詫びというか…。これやる。」

ネコはポケットからきらびやかな紙切れを取り出しました。

それは『島の遊園地行き』と書かれた乗船券でした。

ネコは言いました。

「最近できた遊園地なんだけどさ、乗り放題・食べ放題らしいぜ。」

「乗り放題・食べ放題！？」

その言葉を聞いて、キコピオはすっかり機嫌を良くしました。それに安心したネコは続けました。

「そこに行くには一年に一度出港する船に乗らないといけないんだ。その船の乗船券がこれ。ちなみに出港するのは今夜0時だぜ。」

「今夜0時だね。ありがとうネコわん…」

すっかり嬉しくなつたキコピオは踊るように家へ帰つて行きました。

家に帰つたキコピオはジョッペツトじこわんを探しましたが、ジョッペツトじこわんはいませんでした。

代わりに一枚の置き手紙を見つけました。

『今日は帰りが遅くなる、夕飯は作つてあるから温めて食べね』といふ。

寝る前は歯を磨いて、早く寝ること。』

キコピオは置き手紙を読んで、付け足しました。

『今夜0時の船で島の遊園地へ行つてきます。』

書き終えたキコピオは夕飯を食べて、遊園地へ行く支度をしました。

家を出たキコピオは、まず港へ向かいました。

港には大きな船がとまつていて、たくさんの子どもたちが乗り込んでいます。

0時になりました。

《ボーッ。》

船が汽笛をならして、海をすべり出しました。そして、島の遊園地に着きました。

「わーい、着いた、着いた。」

子どもたちは先をあらわって、船をおりました。

観覧車に、ジェットコースターに、メリーゴーランドに、ゲームに、ダンスホールと、ここには何でもあります。

どの乗り物もただで乗り放題、おまけにジュースやポップコーン、アイスクリーム、キャンディなんかのお菓子も、食べ放題なのです。

「あはははは、楽しいなー！」

キコピオもいつのまにか、青い髪の妖精との約束やコーロギのこと、そして、大好きなジョンペックトじさんのことも忘れて遊んでいました。

した。

でもそうしてこなづちに、キコピオは、まわりの子供たちが次々と口バになつていいくことに気が付いたのです。

いいえ、まわりの子供達ばかりではありません、キコピオの耳も口バの耳になり、おしりからは、しつぽがはえてきたのです。

「どうしようー！」

キコピオが叫んだとき、追いかけてきたコーロギがよつやくたどり着きました。

「キヨピオ！すぐ海に飛びこんで逃げるんだ！」これは悪い人たちが、口バになつた子供達を売りとばすところなんだ。君は一生、口バのまま働きたいかい？」

「そんなのいやだ！」

キヨピオ達が海へ向かつて走つてゐると、又してもあのネコに出会いました。

ネコは言いました。

「やあキヨピオ、そんなに慌ててどこへ行くんだ？」

キヨピオの代わりにコーロギが答えました。

「この遊園地から逃げるのや。」

「せうか、でもそつはさせな…。」

ネコが話している間にキヨピオ達は逃げて行きました。すると、ネコは一人を追いかけました。

キヨピオは言いました。

「どうしよう…。あいつ足早いんだよ。」

「仕方ない、一手に別れるぞ。南の海岸で落ち合つぞ！」

キヨピオは言われたようにコーロギと別れ一人で走り続けました。

ふと、後ろを見るとネコが自分を追つて来ています！

キヨピオはこれでもかといふくらい精一杯走りました。

しかし、またキヨピオは呆氣なく捕まつてしましました。

ネコは言いました。

「俺の父さん達はよお、お前等を口バにして高く売りたいんだよ。でもな、コーロギがどこに行つたか教えてくれたら、父さんに無理言つてお前だけは助けて貰えるようにお願ひしてやるよ。」

キヨピオは悩みました。

ひょつとしたら助かるような気がしました。

しかし、コーロギの居場所を教えるつもりはありませんでした。

キヨピオは嘘を叫び上げました。

「コーロギはね、あつちに居るんだよーあつち！僕が指差している山奥一分かる？」

キヨピオが凄い勢いで大嘘をついたのですから、キヨピオの鼻も凄い勢いで伸びていきました。

キヨピオの鼻は田の前のネコを突き倒しました。

キヨピオはネコが倒れたのを見て一安心しました。しかし、自分の伸び切った鼻を見てどうしようかと悩みましたが、不思議なことに鼻は勝手に元の長さに収りました。

キヨピオは海に飛び込むと、「一ロギ」といっしょに板につかまって、やつとのことで港に帰りました。

「いいかい、キヨピオ。わたしも一緒にジェットさんにあやまつてやるから、ちゃんと、『ごめんなさい』って、言えよ。」

「うん。ありがとう、一ロギ」

そして、ようやくキヨピオと一ロギが家に帰ってきたのですが、家中にはジェットさんはいません。かわりに、ドアに張り紙がありました。

『大切なキヨピオがもどらないので、探しに行きます』

キヨピオと一ロギは家で待ち続けましたが、いつまで待っても、ジェットさんはもどって来ませんでした。

そしてキヨピオと一ロギは、悪い知らせを耳にしたのです。

それはジェットさんは、海で大クジラに飲まれてしまつたというのです。

「大変だ！ お父さんを助けなきや！」

さつそく一人は海へ行き、そして大クジラをさがしました。

しかし一人が大クジラを見つけたとき、大クジラは大きな口を開けて、魚と一緒に、キヨピオと一ロギを飲み込んでしまったのです。

大クジラに飲み込まれた二人は、大クジラの口からおなかの中へと泳いで行きました。

すると、大クジラのお腹の中で、ジェットさんはションボリと小舟に乗っていたのです。

「お父さん！」

「おおっ、キラピホー夢じゃないだろ？な、ああ、こちくおいで。  
よしよし、お前をえいでくれれば、クジラの中だろ？とかまいま  
ないよ。」

ジエッペットじーさんはキラピホをしつかりだきしめて、何度もキ  
スをしました。

「ぼくも会えてうれしいよ。でも、クジラの中でもいいだなんてだ  
めだよ。お父さん、家に帰ろう。」

「だが、どうやつて？」

キラピホは、ジエッペットじーさんに言いました。

「舟の中の物を燃やして、煙で大クジラのお腹の中をいつぱいにす  
るんだよ！ そうすれば、大クジラも苦しくなって、口を開けるに  
決まっているよ…」

「せうか、その手があつたが！」

さつそくジエッペットじーさんとキラピホは、イスやテーブルに次  
々とランプの火をつけました。

するとたちまち、大クジラのお腹は煙でいつぱいになりました。  
やがて煙で苦しくなったのか、大クジラは大きな口を開けると、  
「ハアックシヨー——ン！」

と、大きなクシャミをしたのです。

そのとたん、お腹の中の舟は波と一緒に、ものすごい勢いで大クジ  
ラの口から海へと押し流されました。

「やつたー！」

??

??

??

$\frac{1}{7}$

?

(後書き)

後日更新

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1095f/>

---

キヨピオの冒険

2010年12月30日20時55分発行